鹿児島県歴史資料センター黎明館
所蔵品目録(XII) 文書 (3)

Collection Catalogue (XII) : Documents (3)
Kagoshima Prefectural Museum of Culture
REIMEIKAN
1995

鹿児島県歴史資料センター 黎明館

鹿児島県歴史資料センター黎明館
所蔵品目録(XII) 文書 (3)

Collection Catalogue (XII) : Documents (3)
Kagoshima Prefectural Museum of Culture
REIMEIKAN
1995

鹿児島県歴史資料センター 黎明館

はじめに

鹿児島県歴史資料センター黎明館で収蔵している資料は，県内外の方々の積極的な御協力により、現在約６万６千点にのぼっています。

ここに、あらためて皆様の御協力に対し厚くお礼申し上げます。

当館の資料については、広く県民や関係者の方々に活用されることを願って、「美術・工芸」・「美術・工芸(2)」・「文書」・「文書(2)」・「産業（Ⅰ）」・「産業（Ⅱ）」・「歴史」・「歴史(2)」・「民俗」・「考古」・「総記・記録・自然」の目録を発行してまいりました。

本年度は、所蔵品目録第12輯として、文書の部の第３巻を発行することにしました。この目録に収められた資料は、近世の日置島津家文書をはじめ、幕末・維新期に活躍した郷土の人々の文書が中心をなしています。

この目録が、地域の文化向上の一助になれば幸いです。

平成７年３月

鹿児島県歴史資料センター黎明館
館長　井之口　恒　雄

凡　例

1．この目録は黎明館が平成６年12月１日現在で所蔵している文書資料について収録したもので、寄託品は除いた。

2．資料の並べ方は、原則として年代順に行い、一括して所蔵しているものについては家ごとにまとめた。

3．資料の記載は、番号、資料名、数量、摘要、年代、大きさ、受入年・方法、台帳番号とした。

4．資料の大きさは、センチメートル単位とし、縦×横を記した。

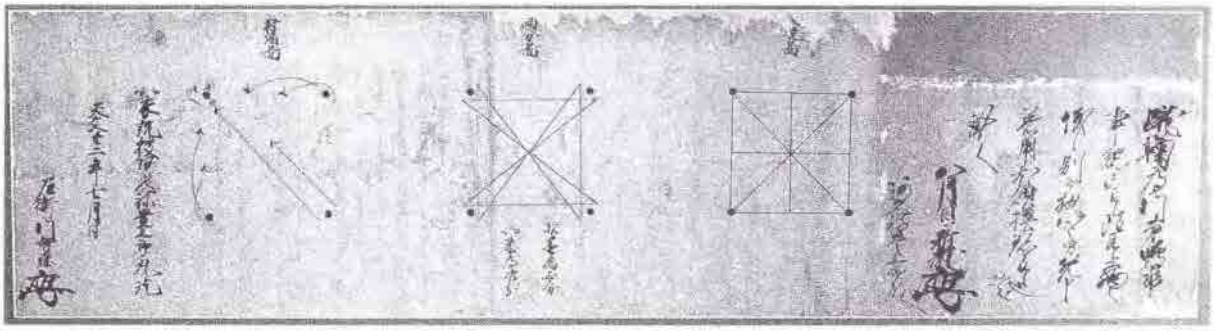
5．資料写真は、資料の中から適宜に抽出し、解読文をつけた。解読文の漢字はできるだけ当用漢字に、変体仮名も平仮名に改めた。

　なお、目録中の番号に○印のあるものは、資料写真として掲載したものである。

6．この所蔵品目録に記載した以外に「歴史」の部等に分類されている文書もある。

目　　次

はじめに
凡　　例
資料写真・解読文……　1～31
所蔵文書目録
　中　　世……　35
　近　　世……　36～37
　明　　治……　38
　大正・昭和……　39
　日置島津家文書……　40～44
　橋口家文書……　45～47
　伊東家文書……　48～58
　寺島宗則文書……　59～63
　吉田清成文書……　64～66

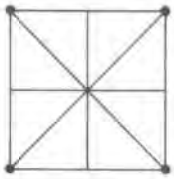


(31.5×124.0)

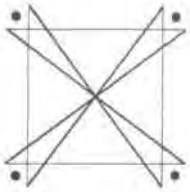
一　飛鳥井雅教鴨沓免許状（中世―一）

蹴鞠為門弟、鴨沓之
事、懇望候、雖有子細之
儀候、別而執心之間、免申候、
着用尤規模珎重候也、恐々
謹言、
八月日　雅教（花押）
阿久祢豊三郎とのへ

八境図

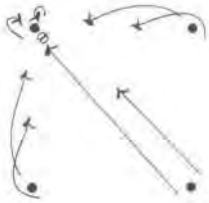


両分図

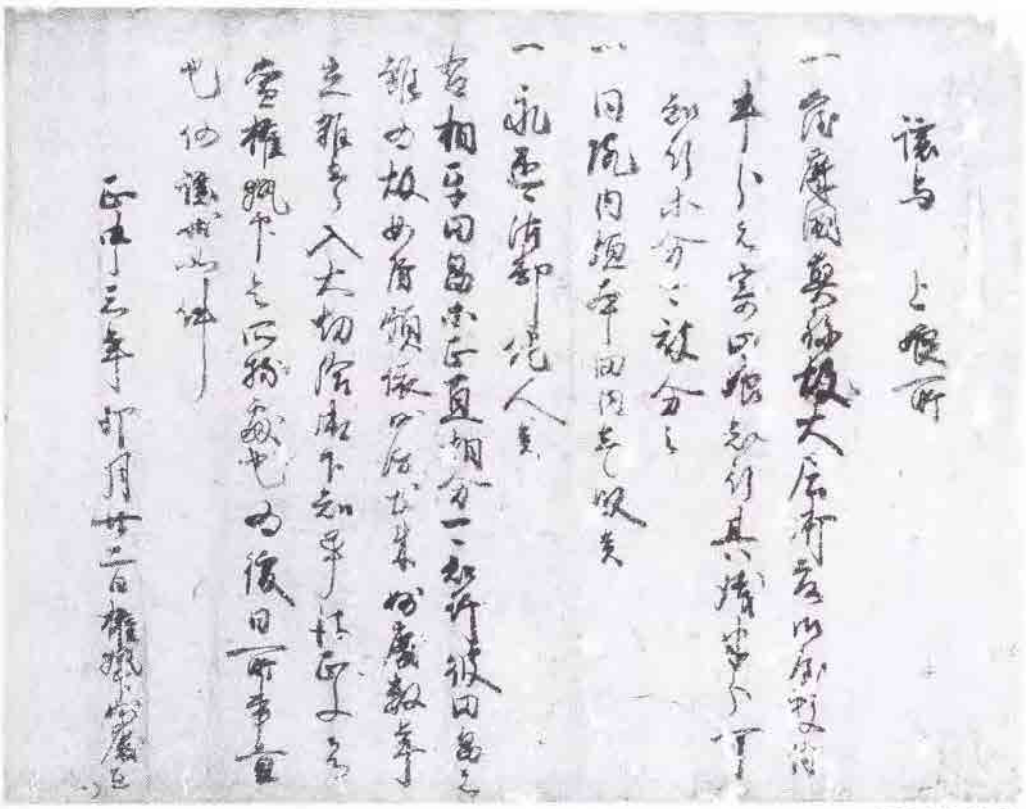


以墨為正分（墨ハ太線ヲ以テ示ス）
以朱為次分（朱ハ細線ヲ以テ示ス）

対縮図



以家説授阿久祢豊三郎丸訖、
天文廿二年七月日
□左衛門督藤（花押）



(29.0×42.5)

二　権執印妙慶譲状案（中世―二）

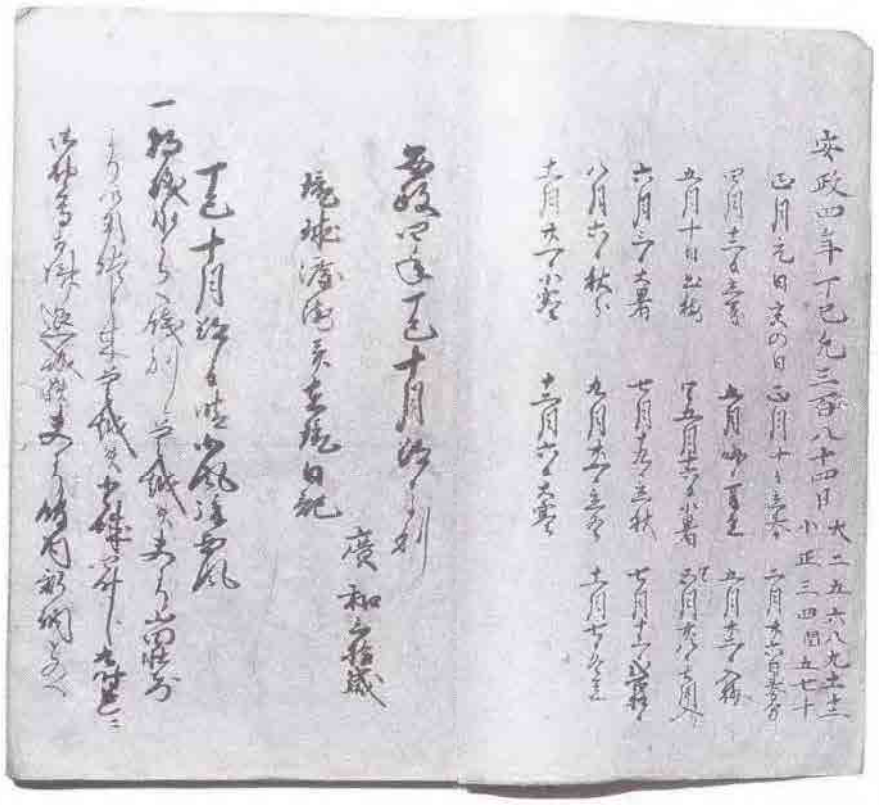
譲与　　上娘所

一　薩摩國莫祢故大尼御房御屋敷内
　半分者、寄田娘知行、其残半分可
　知行、等分可被分之、
一　同院内垣本田内壱段矣、
一　永不可沽却他人矣、

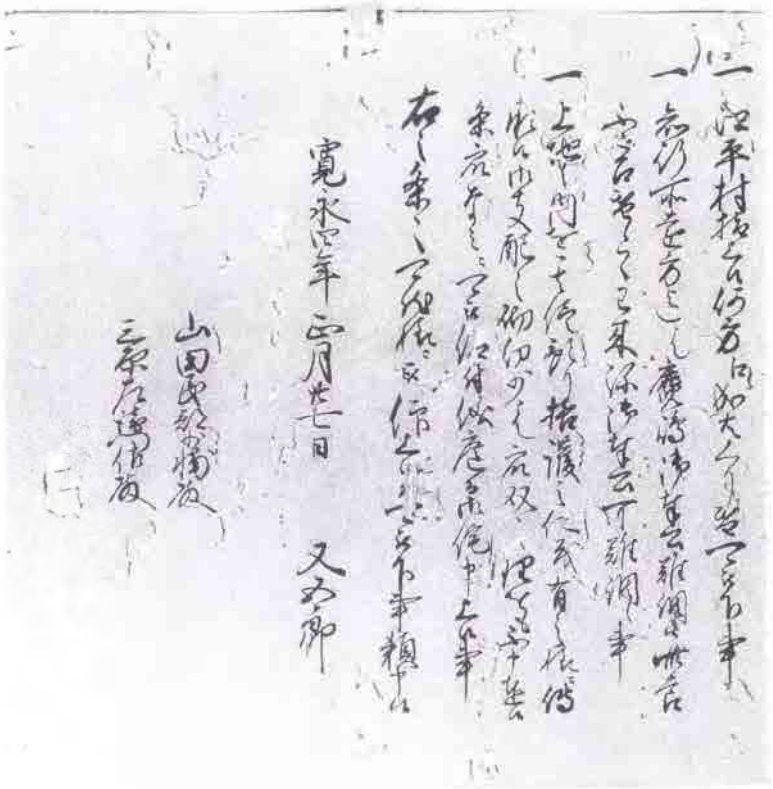
右、相互田畠等正直相分可知行、彼田畠者、雖爲故女房領、依沙汰出來、妙慶數年立雑掌入大切、（マヽ）給御下知畢、彼正文者、嘗權執印令所持處也、爲後日所書置也、仍譲狀如件、

正中三年卯月廿二日　　權執印妙慶 在判

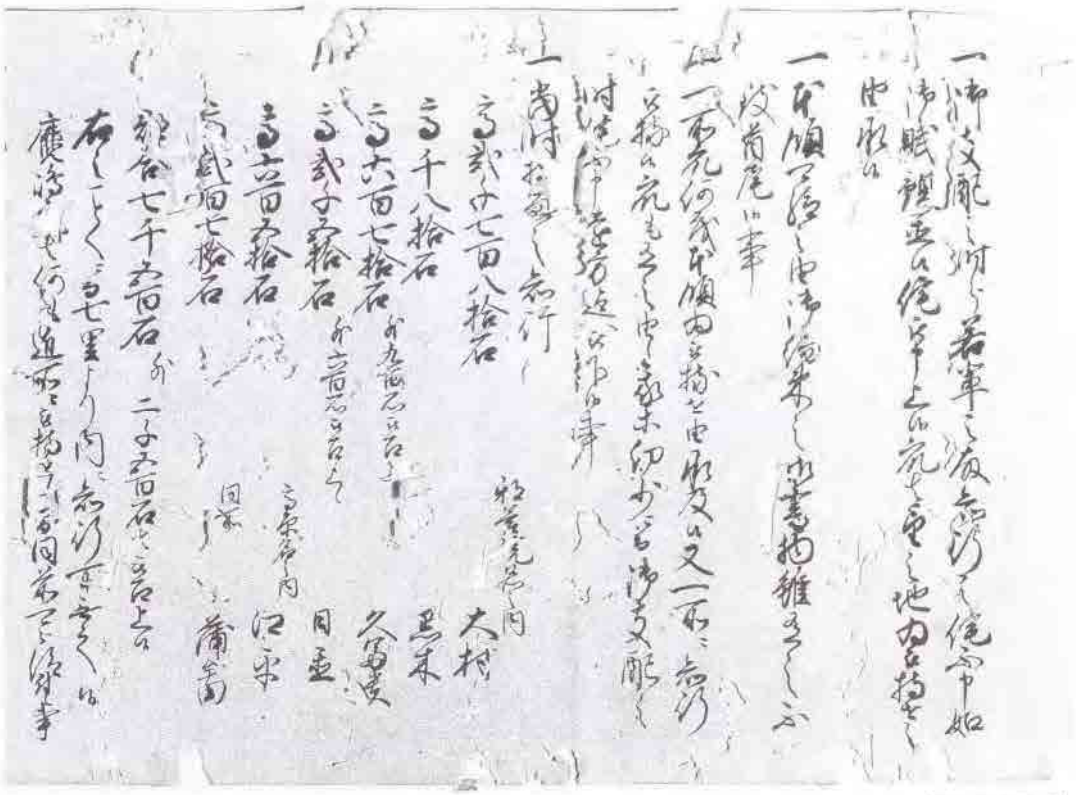
(24.0×17.5)



三　市来四郎日記（近世―二―八）



一江平村指上候、何方江成共くり替可被下事、
一知行所遠方迄ニて麑嶋御奉公可難調候、此節
不被召替候ハヽ、已来弥御奉公可難調候事、
一上地之内を其侭預り格護之仁茂有之様ニ傳
承候、御支配之砌幼少ニて、衆双之理をも不申達候
条、衆なミニ可被仰付儀、遮而御侘申上候事、
右之条〻可然様ニ被仰上候而可被下事頼申候、
寛永四年正月廿七日　又五郎
山田民部少輔殿
三原左衛門佐殿



(29.5×73.0)

四　又五郎条書写（近世―三一）

一御支配之時分若輩之故、知行之侘不申、如
御賦預置候、侘被申上候衆者、望之地為被持せ之
由承候、
一本領可給之由御約束之御書物雖有之、不
致首尾候事、
一一所衆何茂本領為被持せ由承及候、又一所ニ知行
被持候衆も有之由候、我等幼少ニ而御支配之
時侘不申、遠方迄へ被下候事、
一当時持留之知行
高弐千七百八拾石　（ママ）邪答院名之内　大村
高千八拾石　黒木
高六百七拾石　外九百石被召上　久富貴
高弐千五拾石　外六百石被召上候　日置
高六百五拾石　高原名之内　江平
高弐百七拾石　同所　蒲牟田
都合七千五百石　外二千五百石者被召上候、
右之ことくニ而七里より内ニ知行所無之候、
麑嶋士江者何も近所ニ被持せ候間、同前可被仰付候事、

(20.5×51.5)

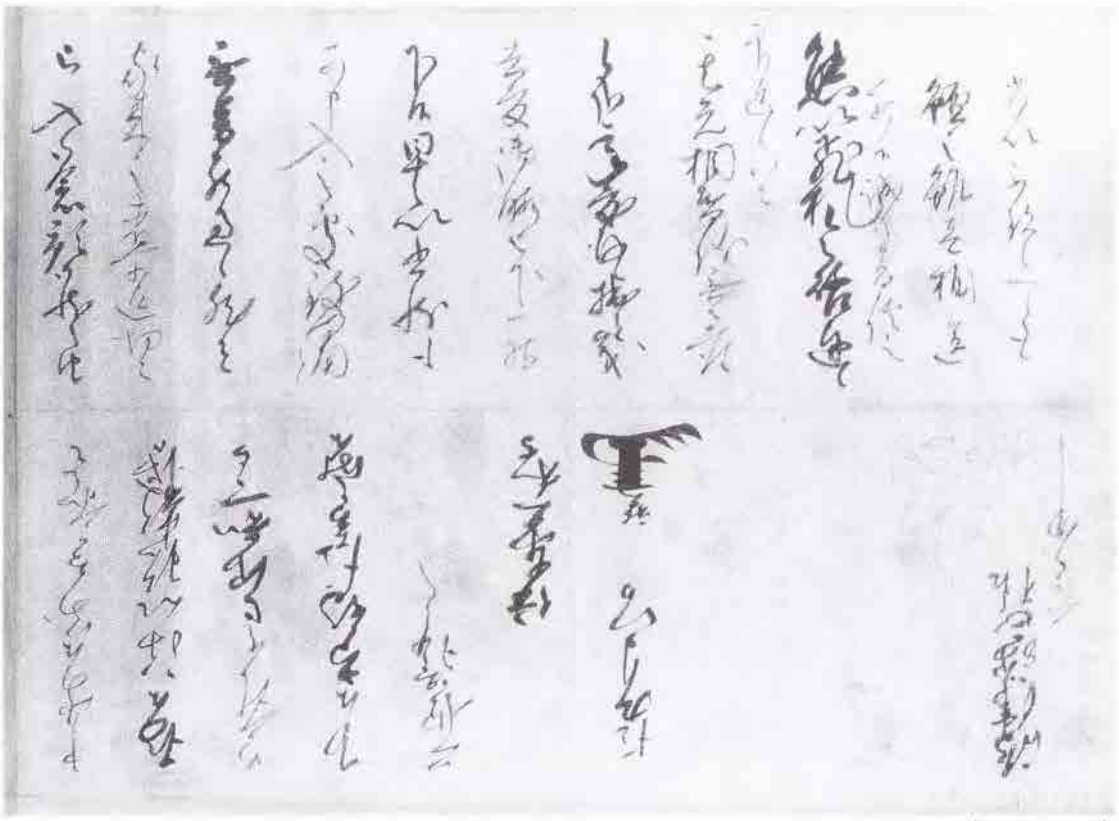
五　飛鳥井雅継書状（日置島津家文書―七）

嶋津左衛門督殿　　雅継

追而令申候、扇子二本
進候、歌ハ梶井門跡
御筆ニて候、御音信迄候、
従愛宕使者被差下之由候間、
令啓候、仍今度於日州表被
砕御手、御存分被仰付候由、京
都風聞其隠無之候、誠〻寄
特難短毫尽存候、尤使者差下
可申乍心緒、信長殿御手遣付、
切〻御在洛候故、取紛不及是非候、
於爰元相似之御用候者、可被仰上候、
不可有疎意候、猶志水入道可申候、恐〻謹言、

六月十八日　　雅継

嶋津左衛門督殿



(33.5×47.0)

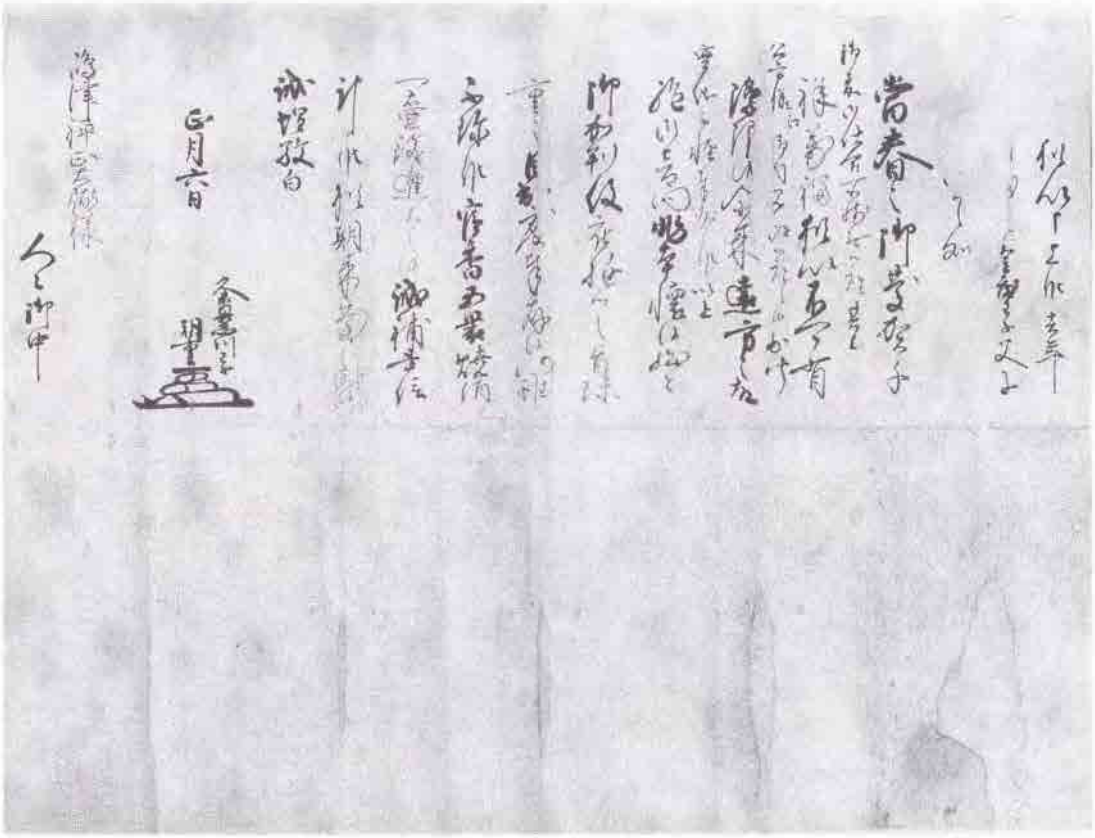
六　伊東祐久書状（日置島津家文書―二五）

尚以不珍候へとも、
鱧之鮓壱桶送
進候、誠御音信之
態以飛札令啓達候、
印迄候、以上、

其元相替儀無御座
候哉、承度存候、拙者義
去夏御暇被下罷
下候、早々以書状も
可申入之處、致何角と
無音罷過候、然者
家来之者所迄切々
被　入御念預御状之由、
申聞候、別而忝令
存候、弥以珍敷儀共
御座候者、被仰知可被
下候、尚期後音之時候、
恐惶謹言、

伊東大和守
後九月八日　祐久（花押）

嶋津弾正様
人々御中

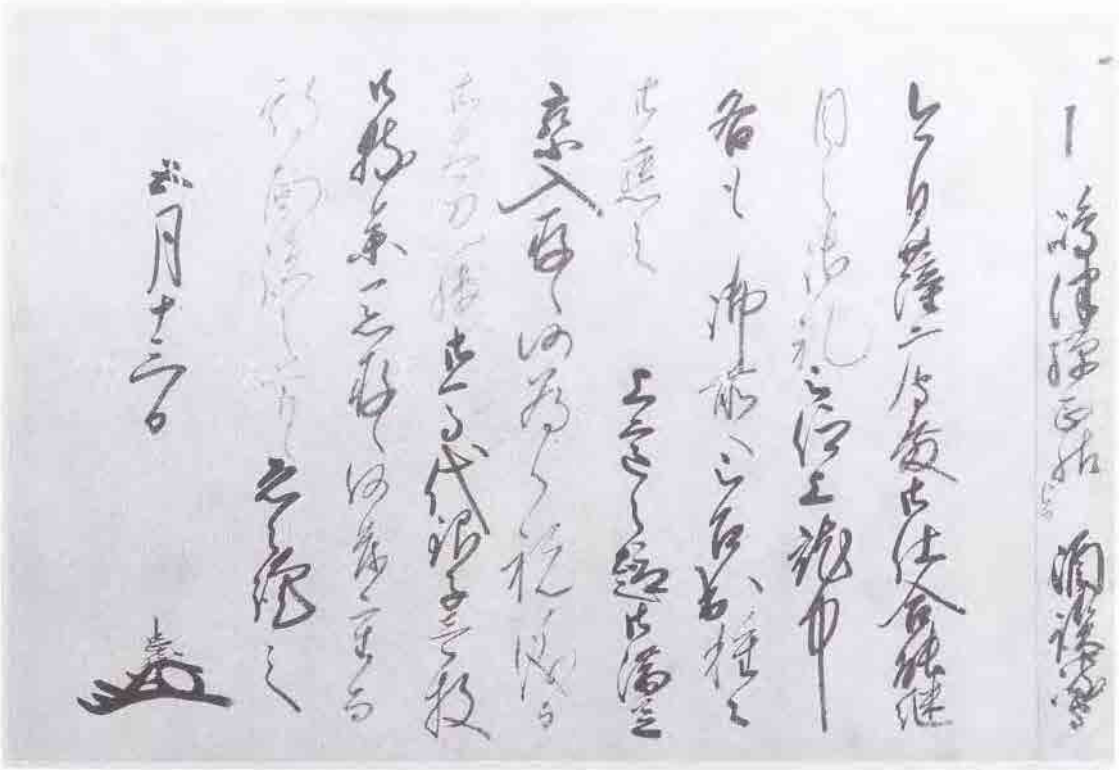


(41.0×57.0)

七　久米具志川王子朝重書状（日置島津家文書―二八）

猶以申上候、去年
□金武王子父子
□候之処、
當春之御慶賀千
御前御仕合所残無御座候、其上
祥萬福、猶以不可有
公方様江御目見得御座候由、外聞
際限候、尓来遠方之故、
實儀不軽奉存候、以上、
絶御音問非本懐候、然者
御加判役被遊候之旨珎
重々、目出度奉存候、仍雖
不珎候、官香五嚢、焼酒
一壷致進上之候、誠補書信
計候、猶期来慶之時候、
誠惶敬白、

久米具志川王子
正月六日　朝重（花押）
嶋津彈正大弼様
人々御中

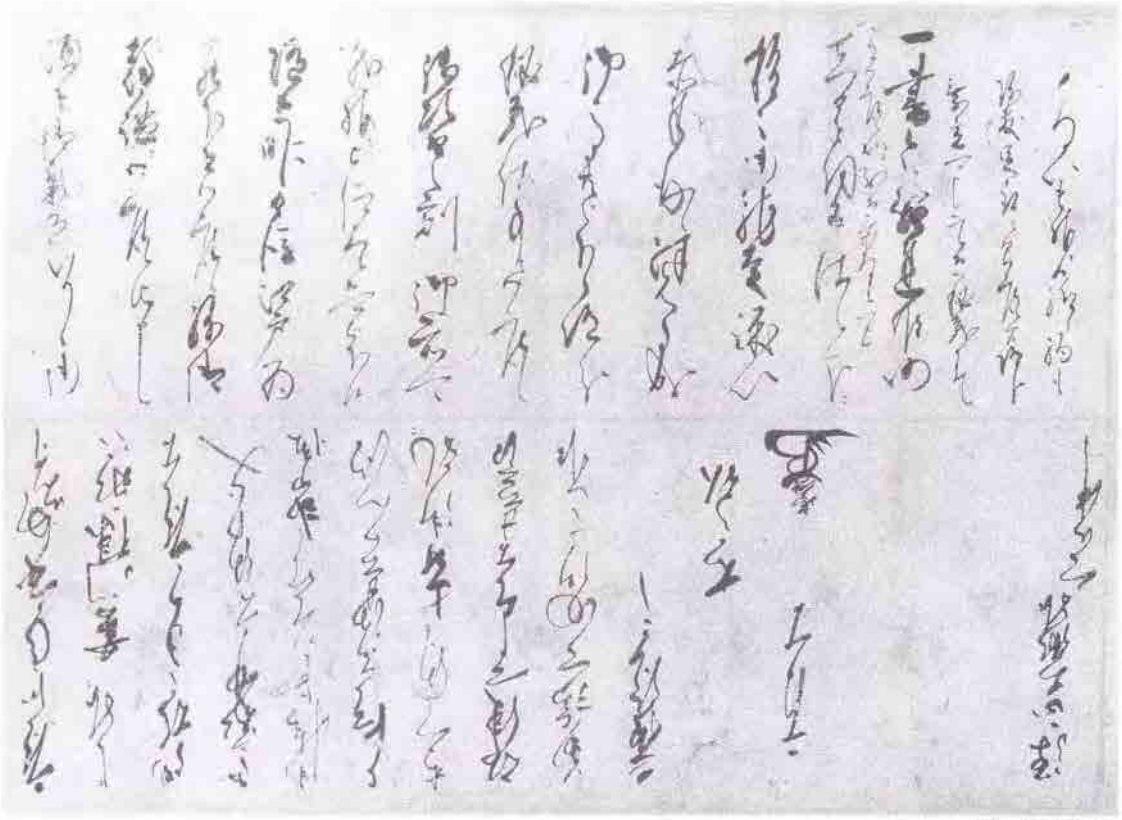


(31.0×46.0)

八　酒井忠勝書状（日置島津家文書―三〇）

嶋津弾正様　　酒　讃岐守
まいる

今日薩摩守殿御仕合能継
目之御礼被仰上、就中
各も　御前へ被召出、種々
御懇之　上意之趣、御満足
察入存候、仍為御祝儀ヲ
御太刀一腰、御馬代銀子壱枚
御持参、忝存候、何茂重而
期面談之節候、恐々謹言、
五月十三日　　忠勝（花押）



(36.5×51.5)

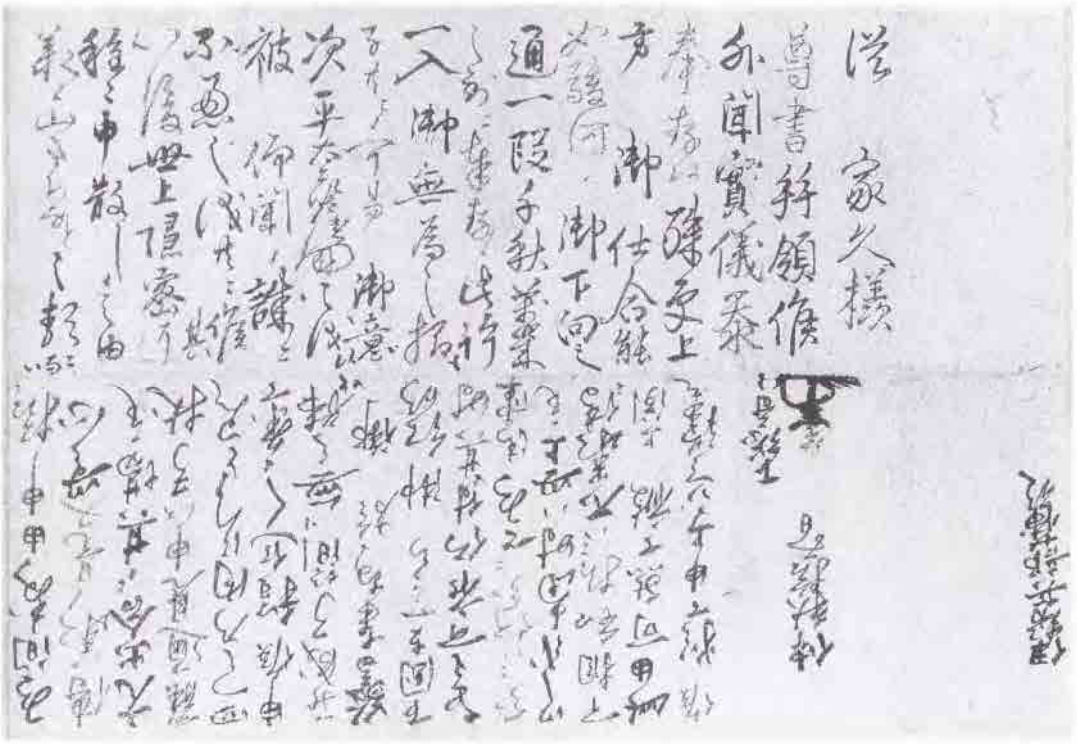
九　島津忠興書状（日置島津家文書―三三）

猶以貴様より給候駒も
珍敷足取ニ而御座候間、随分
乗立可申候、定而御秘蔵にて

一書令啓達候、仍
可有御座候処ニ、別而忝存候、以上、

先日者伺公仕候處ニ、
種々御馳走誠以
忝奉存候、殊見事成
御馬共被下候、随分
秘蔵仕事ニ御座候、
御次而之刻　御前可
然様ニ被仰上候而可被下候、
随而昨日従江戸為
罷下者御座候、弥御
静謐ニ御座候由申候、
頃者御気色いか、御
座候哉、承度存候、先日も
申候様ニ　黄門様永々之
御煩之事御座候間、
御家中衆何も被入
御情を候ハてハと式部殿も
被仰候間、弥其御心得
専一候、何も追付御礼ニ
以使可申上候間、其節
萬端可得御意候、
恐惶謹言、

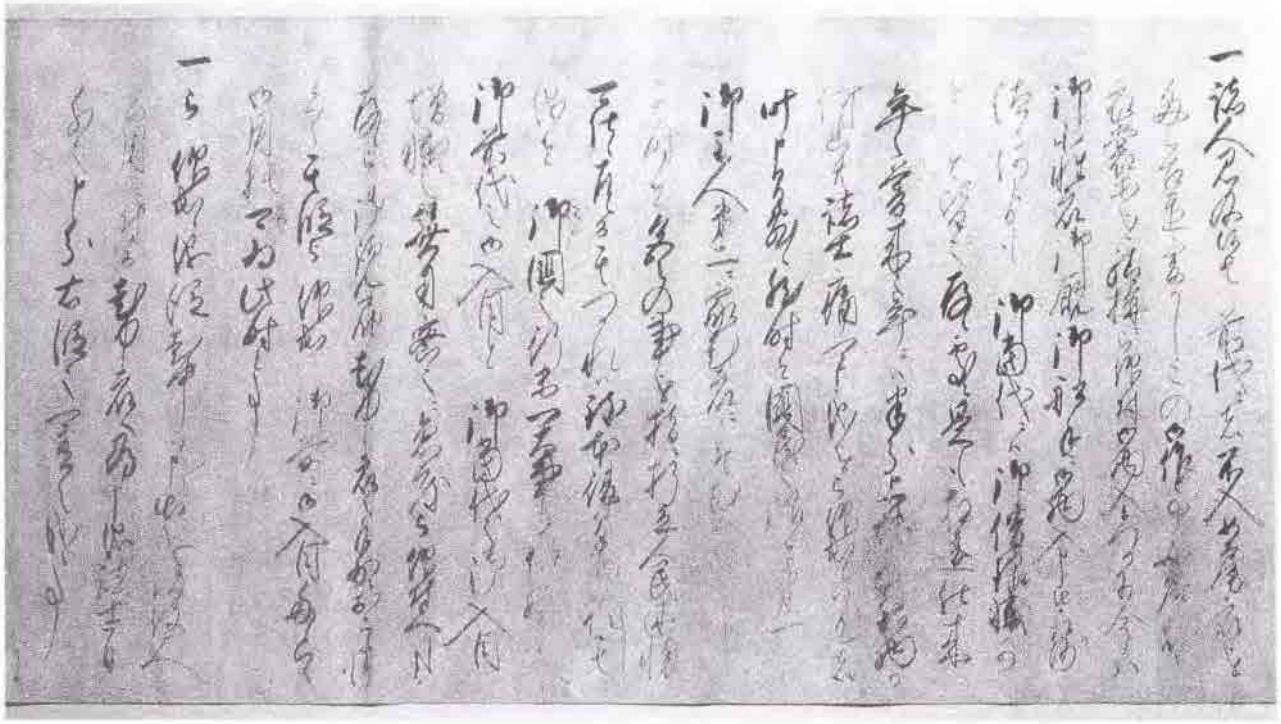
右馬頭
二月十日　忠興（花押）
弾正大弼様
人々御中



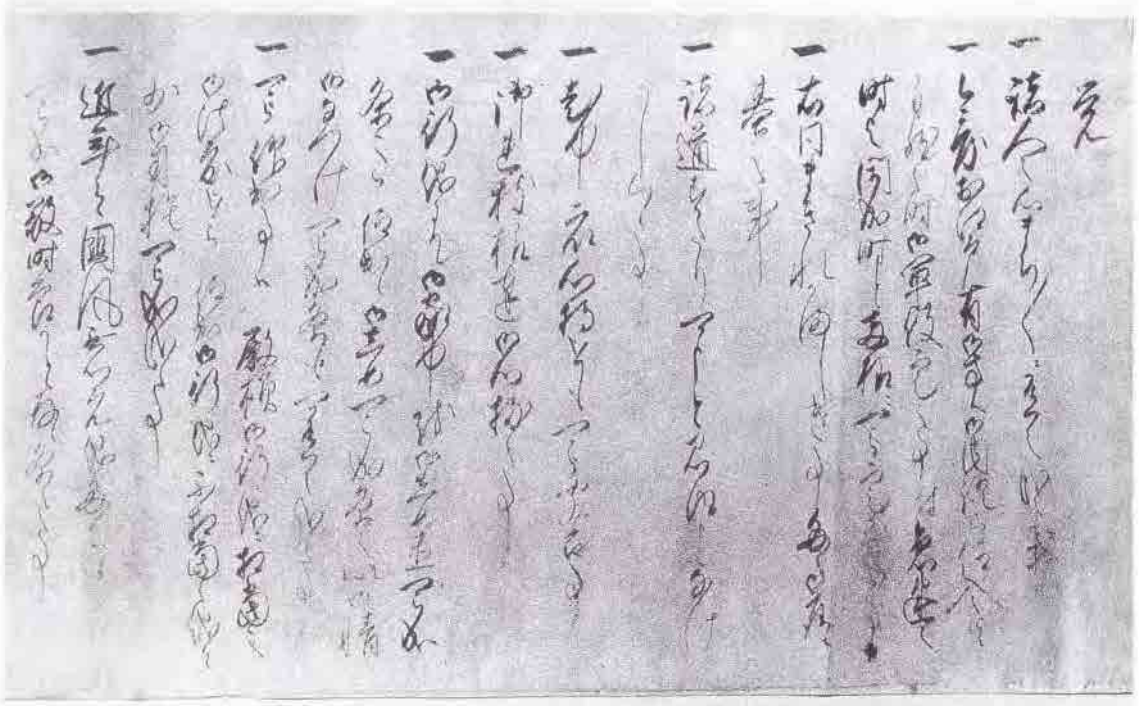
(35.5×52.5)

一〇　島津常久書状（日置島津家文書―五三）

従　家久様
尊書拝領候、
外聞實儀忝
奉存候、殊更上
方　御仕合能、
如駿河　御下向之
通、一段千秋萬歳
之至ニ奉存候、此許も
一入御無為之様
子共ニ候、可易　御意候、
次平太郎左衛門尉之儀
被　仰聞候、誠ニ
不慮之儀共ニ候、其
以後世上隠密に
種々申散し候之由、
承候、山たちなと之類ニ而ハ
有間敷候由申様ニ
傳承候、是又無心
元出合ニ候、其場も
罷通見申候、弓杖
四つ、乃内にて候と見え
申候、程近く候条可
罷成了簡も無之躰ニて
驚奉存候、於　御
下国者一すち　御糺明
をも可被仰付候、其時
分ニハ何分ニ可有御座
候之哉、当時ハ世上も
可相知様ニハ不承傳候、
此由可然可被　上聞
候、猶可申上候、恐々謹言、
下総守
仲秋拾五日　常久（花押）
伊勢兵部少輔殿



一諸人見及候者、前代ニ者不入女房衆を
多被召置、爰かしこの御作事女房衆之
衣裳等を結構ニ被仰付御物入候つる、于今ハ
御小性衆、御厩、御船手ニ御物入申由取沙
汰候、何分も　御当代ニハ御借銀滅可
申と皆々存候處ニ、是も相違仕来、
年之暮来々年ニハ半分上地□出物か
何れ共諸士痛可申儀を被仰出候ハて者
叶申間敷候、然時者國民之眼者第一
御主人、第二ニ家老衆ニこそむけ□申候、
其時者色々の事を指ニ折立、人民述懐
可仕候、左候而其つかれハ致本復間敷候、於其
儀者御國之行末一大事ニ存候、条々
御前代之御入目と　御当代之御入目
増減之算用密々ニ急度被仰付候へかしと
存候、被御覧届、老中衆之手前ニおこたりも
候ハ、其段被仰出、　御前ニ御入目多候ハ、
御用捨可為此時候事、
一被　仰出候儀、従老中被申出儀、諸役人
公用ニ付而老中衆へ尋申儀、諸士自
分之申分、右段々可有之哉之事、



(35.5×159.0)

一一　島津久慶草案（日置島津家文書―七三）

覚

一諸人之心まち〳〵ニ有之哉之事、

一今度於江戸有御方へ御内證被仰入之由候、
自然之時御軍役定之事、付、急速之
時与閑成時と両様ニ可被定□事、

一右同まきれかましき事多〻御座候
基之事、

一諸道すたり可申と見得申候、なけ
かしく候事、

一老中衆心持をも可被聞召事、

一御連技様達御心持之事、

一御行儀にて御家中を御しめ置可被成
条〻被　仰出候、御しめ可被成条〻以御情
おなつけ可被成条も可有之哉之事、

一可被　仰出事ハ、　殿様御行儀ニ相当之
御法度を被　仰出、御行儀ニ不相当之儀者
少御用捨可被成哉之事、

一近年者国風無心元儀多〻□
可被成御敬時節かと存候条〻之事、

(21.5×81.0)

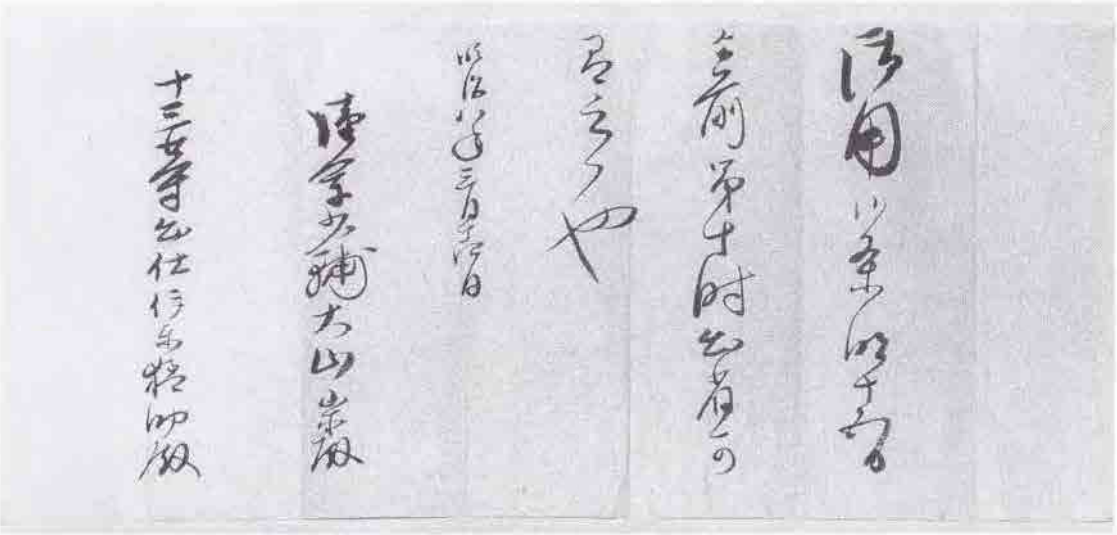
加賀守船将
　　橋口次郎

右之通申付候条、
速ニ荘内港々
進船攻撃
いたし候様、
精ミ盡力
可致候事、
　　辰八月

奥羽鎮撫
總督府□

〔印文奥羽鎮撫総督〕

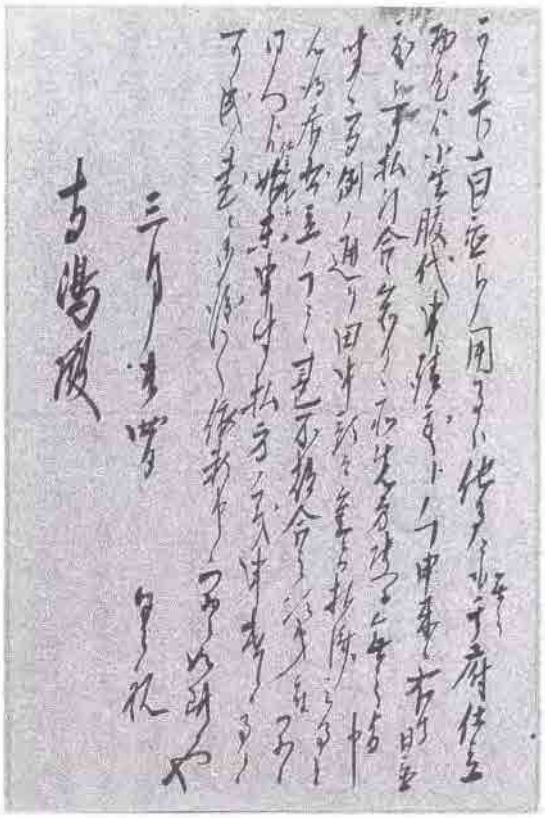
一二　奥羽鎮撫総督府通達（橋口家文書―五三）



(16.0×28.0)

一三　大山巌呼出状（伊東家文書―六五）

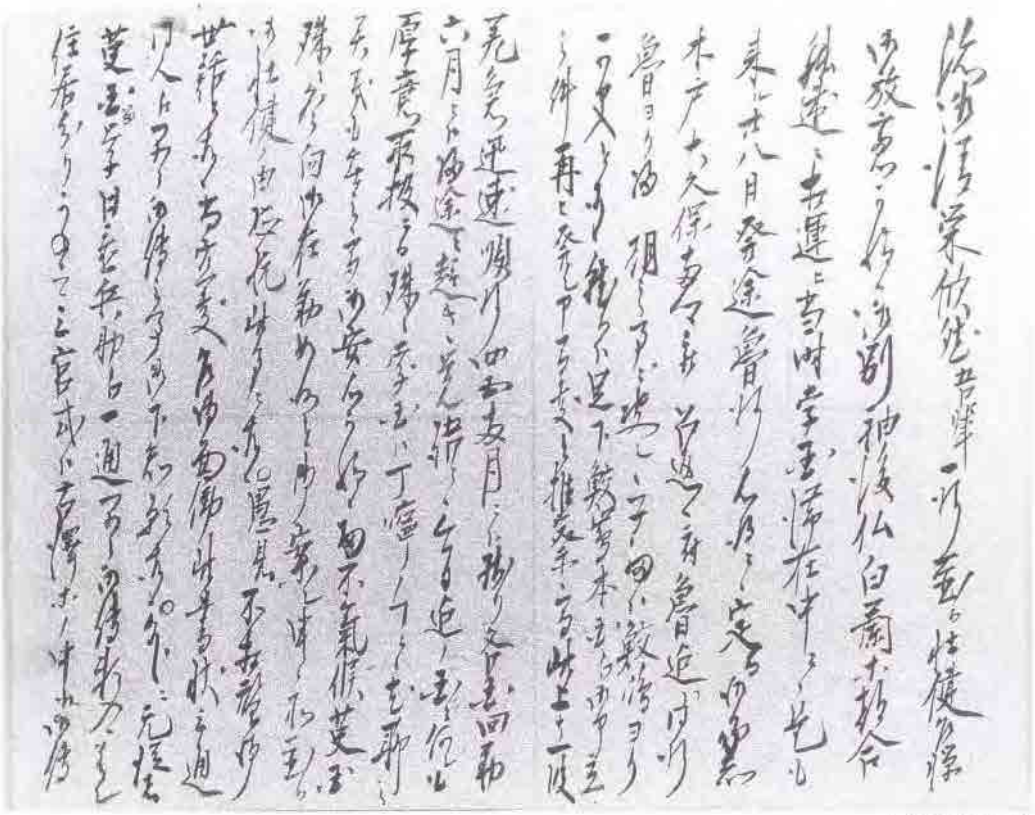
御用候条、明十五日
午前第十時出省可
有之候也、
明治八年三月十四日
　陸軍少輔大山　巌
十三等出仕伊東猛助殿



可被下候、日置江ノ用事ハ他事ニも無之、其府仕立物屋ゟ小生服代申請度トノコト申来候、右者日置度〻可払引合参リ候所、先方決而無之旨申聞候間、例ノ通リ田中預ケ金ニ而払済之事と心得居書立ノコトニ候、甚不都合之次第ニ付、早〻同人ゟ仕立屋江始末申聞、払方ノ義申遣し候事ニ候、可成速ニ御渡し依頼申候、早〻如此候也、

三月廿四日　　具視

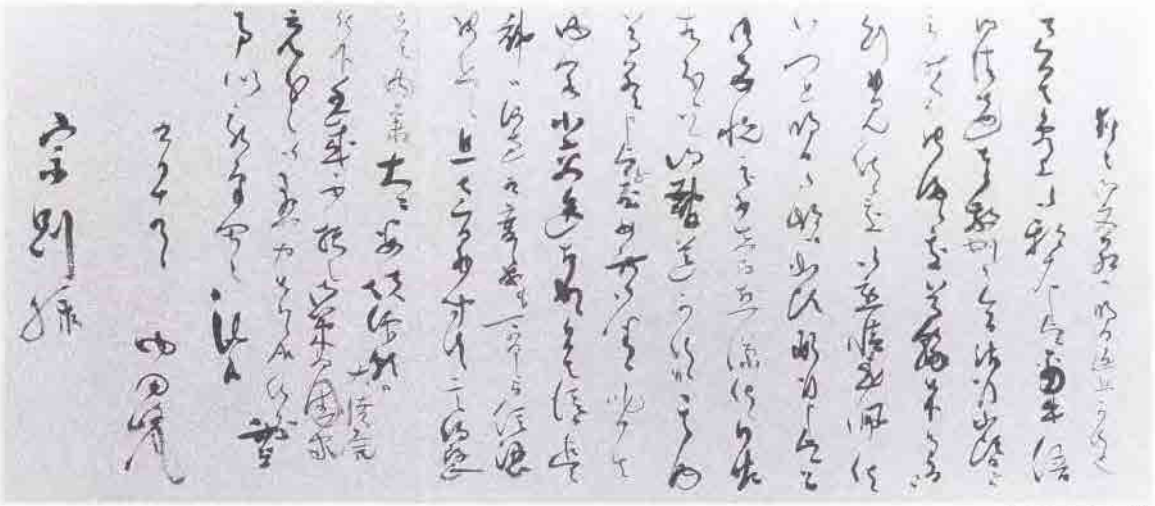
寺嶋殿



(20.0×25.5)

一四　岩倉具視書簡（寺島宗則文書―九）

弥御清栄欣然吾輩一行至而壮健、乍憚
御放慮可給候、御別袖後仏、白、蘭等都合
能速ニ相運ヒ、当時孛国滞在中ニ候、是も
来ル廿八日発途魯行心得ニ候、定而御承知
木戸、大久保両卿被　召返候ニ付魯迄ハ同行、
魯ヨリ帰　朝之事ニ決シ候、子細ハ鮫嶋ヨリ
可申入と存候、就而ハ足下鮫嶋本国江御申立
之件、再ヒ発シ申間敷と推察候間、此上者一段
差急迅速順行、四五両月ニハ残リ各国回勤、
六月ニハ帰途ニ趣キ候覚悟ニ候、今日迄ノ国々何レも
厚意取扱ニ而殊ニ孛国ハ丁寧ノコトニ候、尤聊之
異義も無之候間御安心可給候、扨不気候英国
殊ニ孛、白御在勤如何と御案シ申候所、至而
御壮健ノ由恐悦此事ニ存候、○愚息　不相替御
世話ニ存候、尚宜敷乍御面働此書状之通
同人江早々御傳之事御下知願存候、○外ニ元従者
英国留学日置兵助江一通早々御傳頼入候、若シ
住居分リかね候ハヽ、三宮或ハ古澤等ノ中江御傳



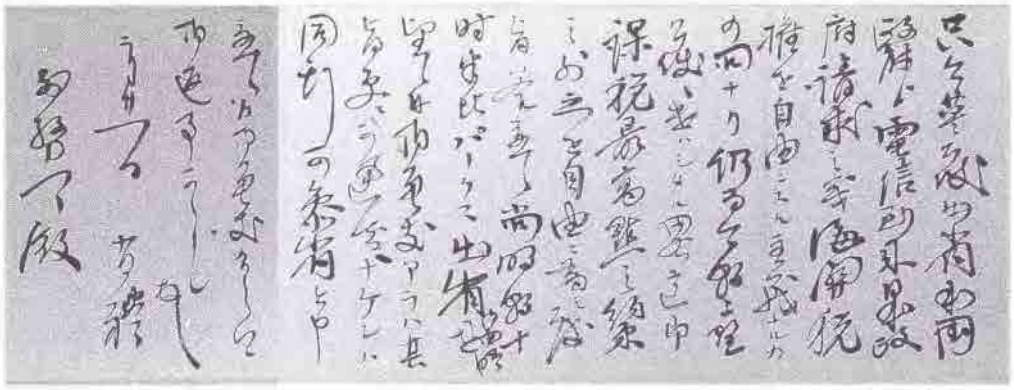
(17.0×39.5)

一五　内田政風書簡（寺島宗則文書―二二）

猶〻御文箱は明日返上可仕候也、
過日は参上御邪魔申上候、爾来倍
御清適奉敬賀候、今日銀行出頭日ニ而
三時過罷帰候處尊翰被下候旨ニ而、
則拝見仕候處御懇情感佩仕候、
いつれ明日御邸江出頭形行申上候ハ、
御喜悦可被為在与想像仕候、
御暇相分候ハ〻御発送可仕候、其内
尊答申上置度如此御座候、昨日者
内閣小交迭(更)相成候へ者後日迄ニ
動は何辺相変候義も可有之与信認
罷在候、且過日拝聞仕候条約改正
云〻内承大ニ安堵、仰願ハ大憤発
被下、千歳不朽之御策為国家
充分之御尽力被下候様何分此旨、
旁以乱筆勿〻頓首、

九月十九日　　内田政風

宗則様



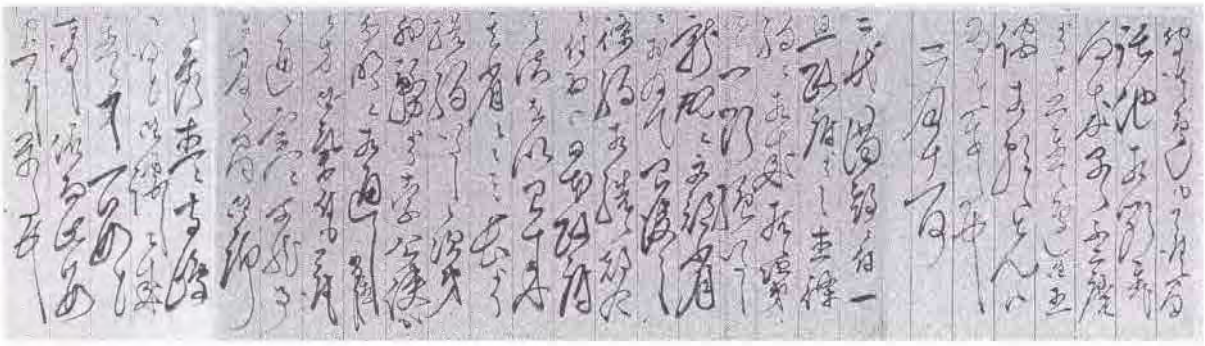
(17.0×45.5)

一六　森有礼書簡（寺島宗則文書―一〇九）

只今英公使出省、本国
政府ゟ電信到来、日本政
府請求之義海関税
権ヲ自由ニスル主義ナルカ
の問ナリ、仍テ今朝上野
公使へ遣ハシタル略意即
課税最高点之約束
之外之を自由ニ為シ度
旨答置候、尚明朝十
時半比パークス出省御面唔を
望候付、御差支アラハ其
旨更ニ可通知、ナケレハ
同刻可参省ト申
置候間、御差支有之候ハ、
御返事可被下候、頓首、

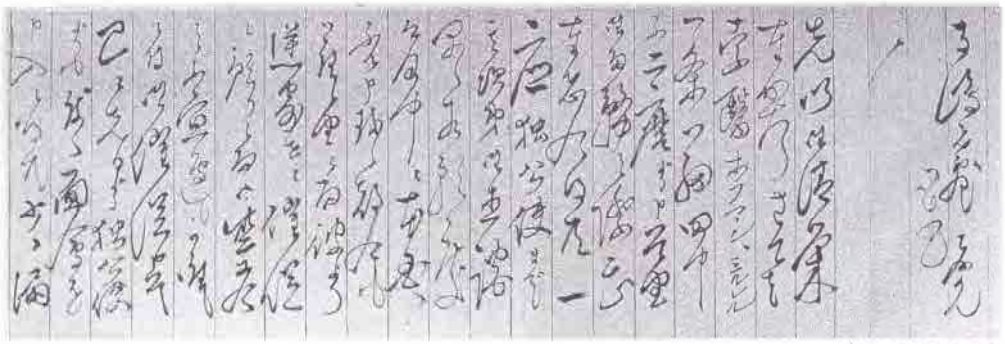
二月廿一日　有禮

外務卿殿



聞仕候邊も御座候間、
託他相断置申候、
何卒早〻不二麿
より申上置候邊御直
談相願候、先ハ
為其草〻頓首、
二月十一日

二氏満期ニ付一
旦政府より之直條
約ニ相成居候次第
を一断絶いたし、
新規に文部省
ニおゐて已後之
條約相結候都合
ニ付而ハ、日本政府
之法を以已来
其省〻〻之長より
結約いたし候次第、
外務より寺公使へも
分明ニ相通し置
候方御気付も御座
候通、実ニ可然事
と奉存候間、御序
之節直ニ寺嶋
へ得と御談し被成
置候ハ、一段と
奉存候、依而此段
申上候、草〻頓首、

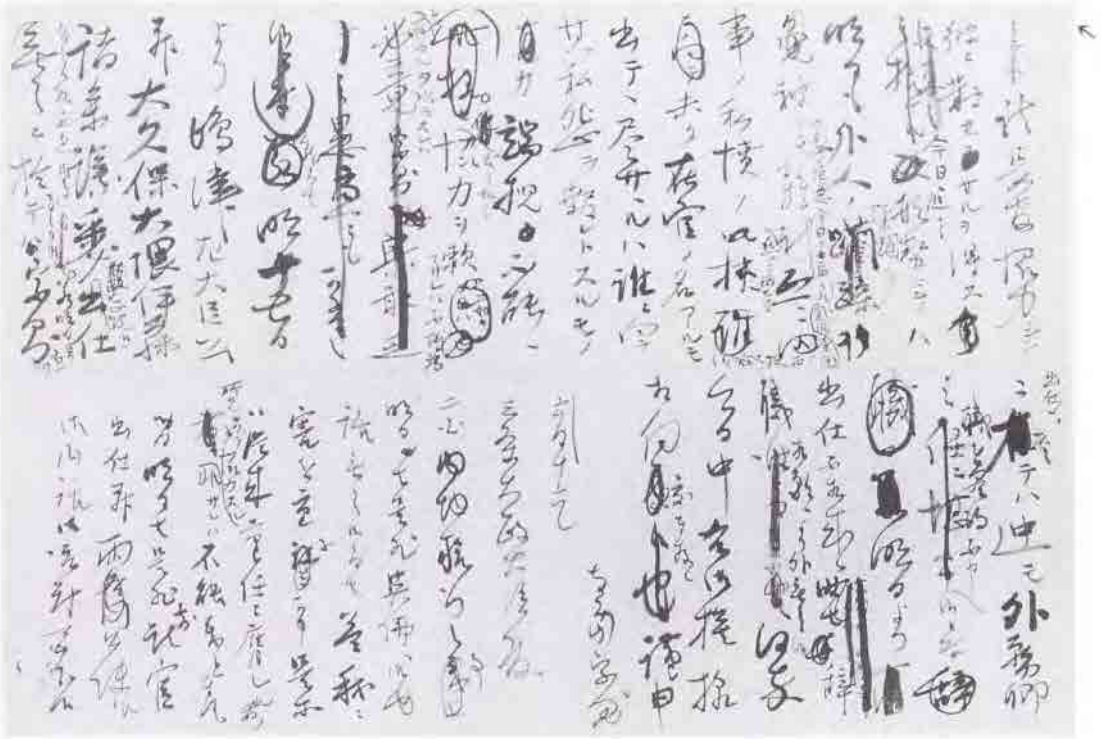


(16.5×106.5)

一七　木戸孝允書簡（寺島宗則文書―三六）

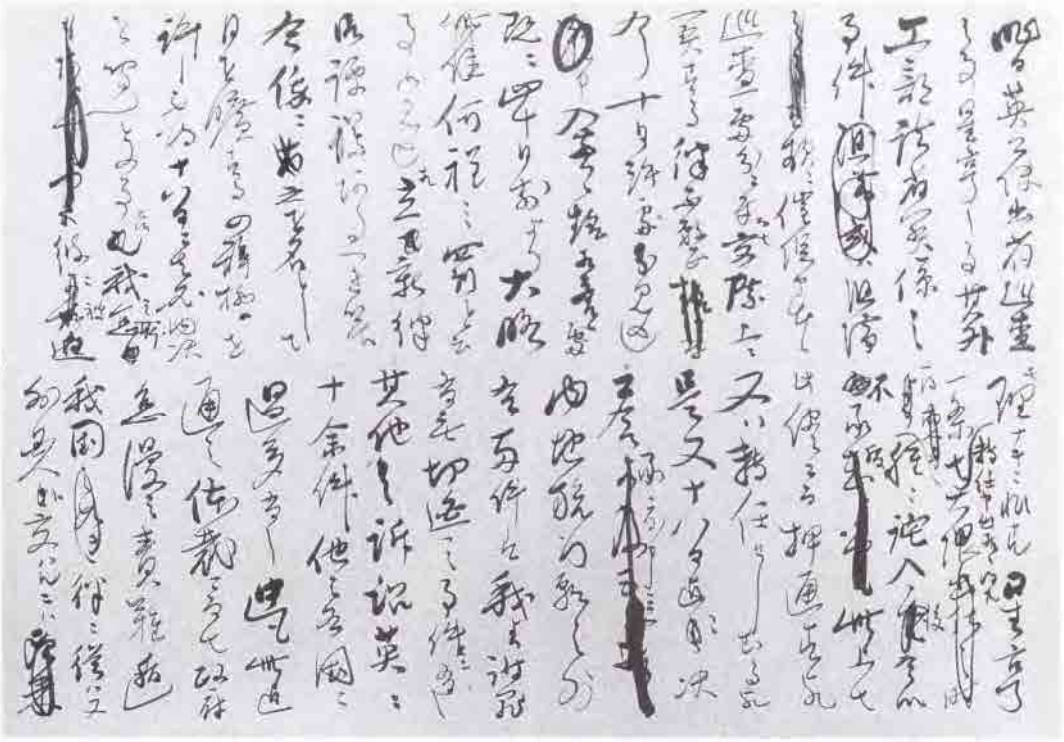
寺嶋老台　御直　　孝允

先以御清栄
奉賀候、さては
孛医ホフマン、ミルレル
一条い細田中
不二麿より申上候由、
御多務之際甚
奉恐入候得共、一
応独公使まで
其次第御直談
早〻相願候處、
今月中ニ本国へ
否申越候都合も
御座候由二而、彼より
逆寄せニ催促
ニ預り候而は些工合
之不宜邊も御座候
ニ付、御催促申上候、
已に先日より独公使
よりも度〻面会を
申入候得共少〻漏



諸長官協力シテ
彼ニ対セサルヲ得ス、
今日迄之形勢ニテハ
明日も外人ノ蹂躙ヲ
被ルモ難計、外襲ノ危急
今日ニ逼リ居
全国黙過ノ為致スヘキ筈無之、
然ルニ諸大臣互ニ旧
事ノ私憤ヲ挟、
未タ在官ノ名アルモ
出テ、尽サヽルハ誰ニ向テ
其私怨ヲ報ントスルモノ
カ、端捉(ママ)不能候
トノ所見ヲ以テスレハ右之如ク
協力ヲ頼マサレハ不能為
就而者 明十七日
より嶋津左大臣公
并大久保、大隈、伊藤
諸参議悉正院江出仕
有之候様至急御達有之度
奉願候、若明日ヨリ右一同出仕
無之ニ於テハ宗則
ニ於テハ迚モ外務卿
之職を尽得不申候ニ付、
明日より出仕不相成候時者辞
職相願候より外無之、何卒
今日中右御模様
相伺度奉存候、謹申、
寺島宗則

六月十六日
三条太政大臣殿
二白　内地旅行之事
明日者是非英佛へ御内
話無之候而者益我ニ
害を重ネ可申、是等
ハ従来重任ニ膺レル者ノ
所見ヲ以テ協力スルニ
非サレハ不能義と奉存候
間、明日者是非前諸官
出仕并両公使江
御内話御取計可被下候、

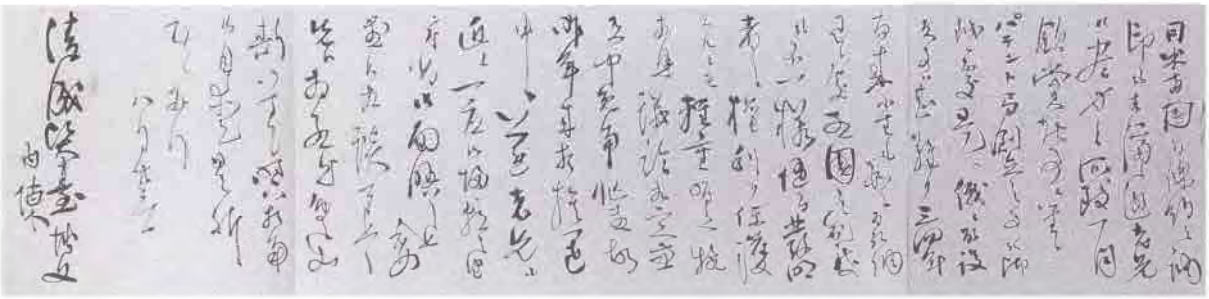


(16.0×188.5)

一八　寺島宗則書簡（寺島宗則文書―六九）

昨日英公使出省、巡査
之事、星亨之事、其外
工部諸省関係之
事件沮滞
頻ニ催促申出候、
巡査處分ニ付而者　交際上ニ
関する律不整、
今十日許處分見込
申入兼候趣相答候處、
既ニ四十日前より大略
何程之罰と云
事御見込相立、新律
御評議あるへき筈、
今俄ニ之を名として
日を曠する辞柄を
許し不得、十八日二者　必内決
を聞んとの事ニ候、我之怠所
彼ニ被迫

モ理ナキニ非す、星亨
一条者　転任申出居候得共、大隈
一同種々詫入候後今以
不承服、此上者
此儘二而　押通す歟
又ハ転任せしむる歟、
是又十八日迄ニ決
答承度申立、
内地旅行願之外、
右両件は我より謝罪
有無切迫之事件ニ有之、
其他之訴訟英ニ
十余件、他之各国ニ
過多有之、迚も此迄
通之体裁　二而者　政府
怠慢之責難遁、
我国律ニ従ハヌ
外国人ト交ハルニハ

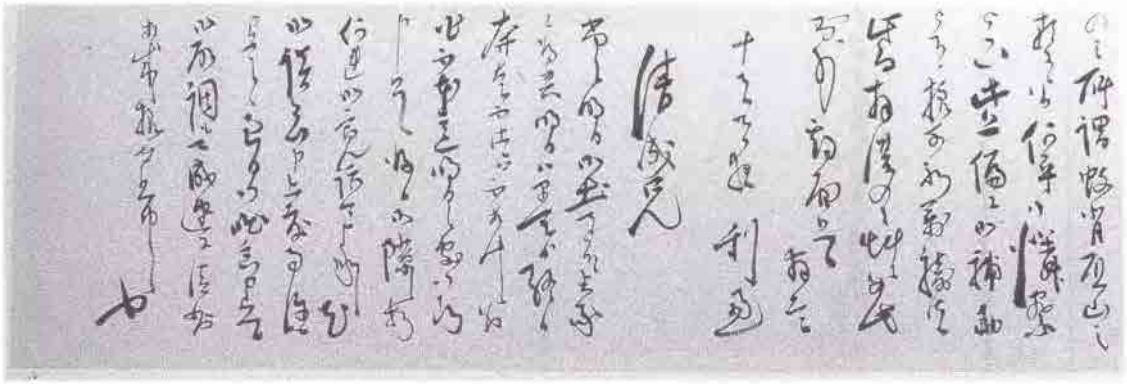


日米両国間條約之調
印も相済候趣、老兄
御尽力之所致、一同
欽賞此事ニ御座候、
パテント局創立之事被仰
越候處、是ハ俄ニ取設
候事ハ甚難ク、三四年
而来小生も数〻為取調
見候處、外国之制度
も不一様、随而發明
者之権利ヲ保護
スルニモ軽重有之様
相見、議論相定兼
候中兎角悩敷故、
昨年来相捨置
申候、いつれ老兄も
近〻一応御帰朝之由
ニ付、尚御面唔之上委
敷御相談可申上候、
先ハ拝答迄匆〻如
斯御座候、時下折角
御自愛是祈、
頓首再行、
八月廿三日
清成賢臺　博文
内陳

(16.0×120.0)

過般来両通之貴
翰、慥ニ相達謹讀、
先以御清迪恭賀此
事ニ御座候、小生儀依
舊不相変瓦全、
乍憚御休慮可被下候、
去説大久保氏暗
殺云々之事ニ付而ハ、如
貴諭遺憾無限
事ニ御座候、国家之大不
幸、實ニ不過之候、
米国海軍士官カウルス
夫婦へ御添書相達
候ニ付、早速夫婦
共相招、吹上ケ禁園中
ニ而 午飯抔為致、尤同日ハ
西郷・河村も同伴
せり、其後Mrs Coules横浜之寓
居へ被相招、西郷同道
ニ而 罷越申候、

一九　伊藤博文書簡（吉田清成文書―三）

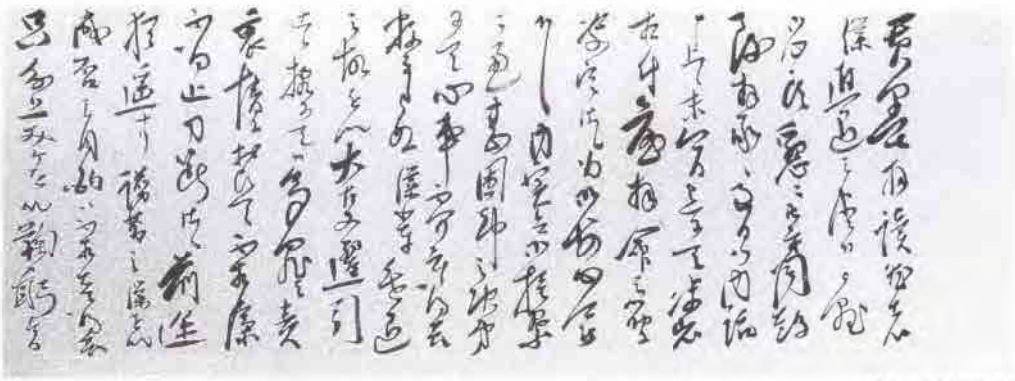


のミ、所謂蚊背負山之
類に候間、何卒御憐察
被下、此上偏に御補助
被下候様千祈萬祷仕候、
此旨拝復のミ草々如此、
書外期面上候、拝首、

十月九日夜　　利通

清成兄

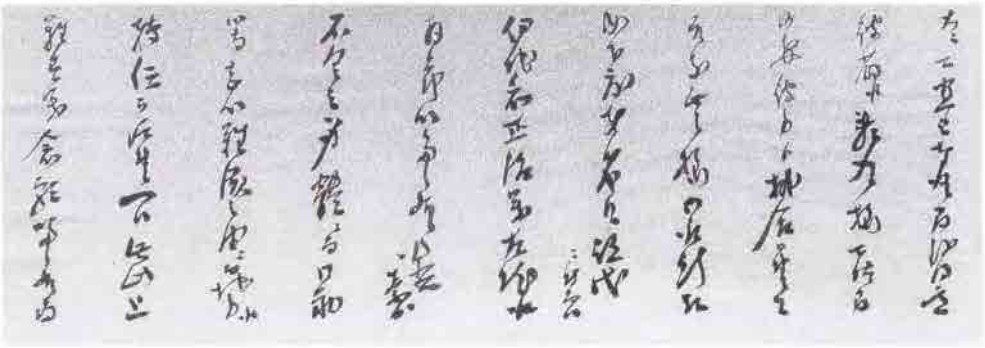
尚々、明日御出可被下候旨承
候得共、明日ハ早天ゟ終日
奔走不仕候而不相叶候間、
乍不本意明日之處御断
申上候、後日御隙之折
何れ御寛話可申承候、尤
御談合申上度事件も
有之候、過日御咄合申上候、
御取調も可成速に清書
相成候様奉希候也、

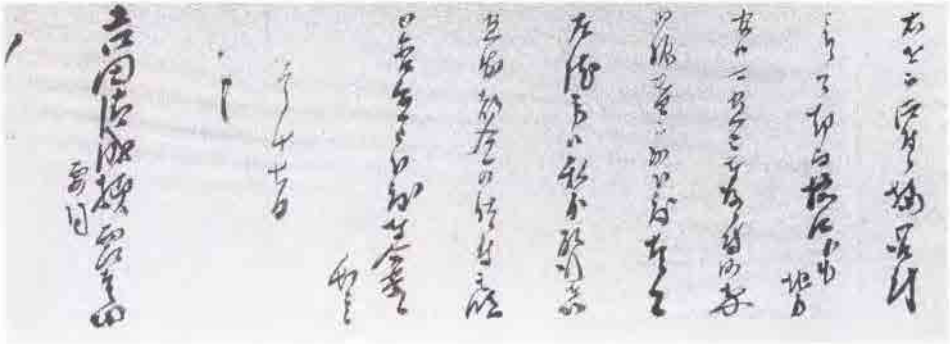


(18.5×108.5)

二〇　大久保利通書簡（吉田清成文書―一三）

貴墨拝讀、然者
僕進退之義ニ付、被懸
御心頭、懇ニ被示聞趣
致拝承候、過日御内話
申上候末、今日迄にて決着
相付、愈拝命之筋に
決定仕候間、御安心可被
下候、内実者御推察
之通、甚困却之次第
にて、心事不可言候得共、
数ならぬ僕輩進退
之故を以大事遷引
仕候様にてハ、多罪之責
衷情におひて不相済、
不得止刀断仕候、前途
猶遙ナリ、譏劣之僕を以
成否之目的ハ不相立候得共、
只書上丈ケを以鞠躬する





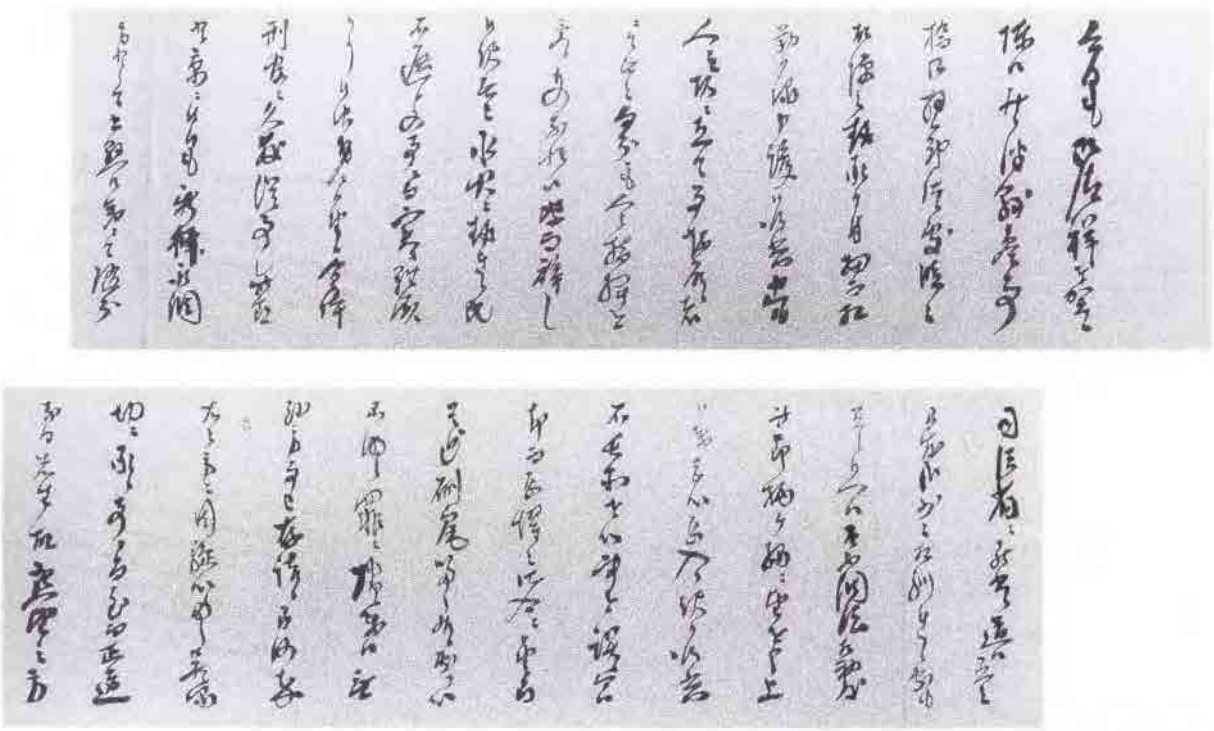
大二可宜与奉存候間致同意、
彼省江頼入候様可仕候間、
何卒彼方ゟ掛合御座候ハ、、
差支無之様御取計被
成下度奉希候、跡代ニ付而ハ、
伊地知正治義左院江
拝命いたし居候得共、素ゟ
不具之身體ニ而日勤
等甚以難渋之由ニ而、地方江
轉任被仰付候へハ、無此上
難有義念願いたし居候間、

右を被仰付候様御取計
被下候ハ、、却而橋口ゟも地方
官ハ可宜与奉存候付、何卒
御振替被成下度、左候ハ、、
左院方ハ私ゟ形行を以
宜敷都合可仕候付、其段
御含置被下度奉合掌候、頓首、

十一月十七日

〆

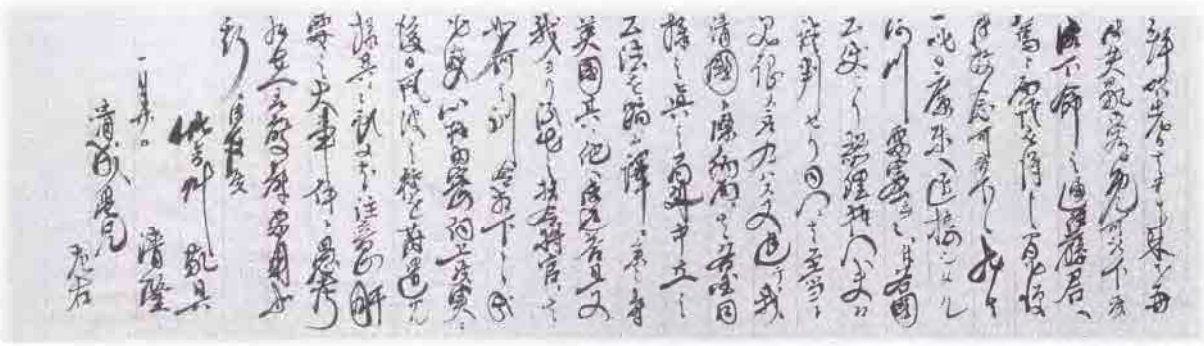
吉田清成様　　西郷吉之助
要詞



(16.5×199.5)

二一　西郷吉之助書簡（吉田清成文書―三一）

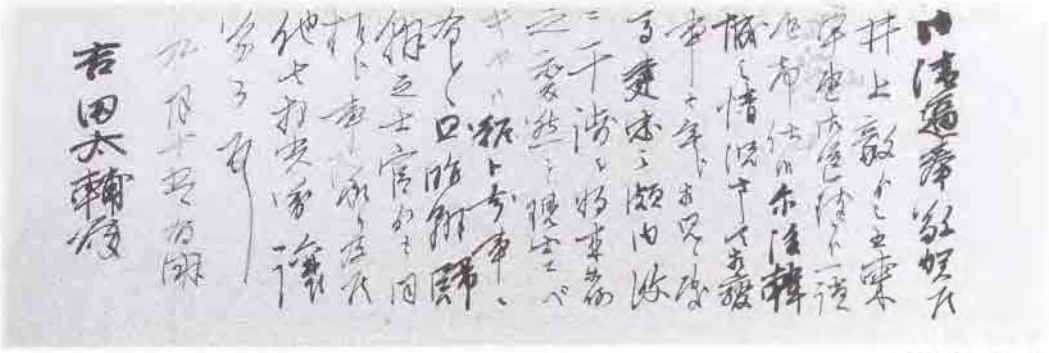
今日も御清祥奉賀候、
陳ハみゝ津縣参事
橋口拝命仕候處、段々
故障之趣承候付、押而相
勤候様申諭候得共、迚も
人之頭ニ立て事を所候者
ニて無之、何分ニも人ニ指揮を
受候ものなれハ、決而辞し
候訳無之、水火ニ趣き候共
不遮との事ニ而、実ニ難渋
かり候次第ニ御座候、全体
刑官ニ久敷従事し、此節
登京ニ付而も、新律取調
方として出懸候義ニて、随分
司法省ニ罷出候道ハ有之
間敷哉、少々相馴れ候處も
有之候へハ、乍不調法相勤度、
此節柄ケ様ニ望を申上、
候義甚以恐入候訳候得共、
不長所を以事を誤候而ハ、
却而恐懼之仕合ニ御座候間、
是迄研究いたし居候處を以、
不明之罪ニ陥候義ハ無
致方事与存詰候間、何卒
右之方ニ周旋いたし呉候様
切ニ承候事ニ而、至而正道
なる先生故、懇望之方



(17.5×65.0)

二二　黒田清隆書簡（吉田清成文書―二九）

拝啓、先日者尊来、乍毎
御失敬御宥免可被下候、
御下命之通、伊藤君へ
篤ト面晤を得申候間、乍憚
御放念可被下候、然者
一昨日廣東へ近接シタル
河川要塞云々ニ付、各国
公使より総理衙門へ夫々
談判セリ、同門ニ者至当ト
見認メ取合ハス、又退テ我
清國ト條約面ニ者各国同
様之眞之局外中立之
公法を踏ム譯ニ参らす、
英国其ノ他へ御返答、且又
我ヨリ派出之指令、将官ニ者
如何之訓令相下ニ候哉、
乍婆心極内密伺上候、実ニ
後日風波之種を蒔置サル
様呉々預メ尤注意肝
要之大事件ト愚考
罷在、取敢す要用如
斯ニ御座候、
此旨草々敬具、
一月廿日　清隆
清成盟兄
左右



(17.0×52.0)

御清逼奉敬賀候、
井上毅公之書柬
早速御送致被下、一読
返却仕候、尓後韓
城之情況さして相変
事も無之相見候處、
馬建忠之頗内政
ニ干渉シ、将来如何
之変然と現出スベ
キヤハ難ト知事ニ
有之候、且昨朝帰
朝之士官公も同
様之事承り及候、
他者拝光萬譲、
草々頓首、
九月十五日　有朋
吉田太輔殿

二三　山県有朋書簡（吉田清成文書―六四）